

カンボジアの復興・開発

天川直子編

アジア経済研究所

研究双書 No.518

天川直子編 『カンボジアの復興・開発』

Kambojia no Fukkō Kaihatsu

(Reconstruction and Development in Cambodia)

Edited by

Naoko AMAKAWA

Contents

- Introduction: Recent Cambodian Studies Conducted by Japanese Researchers
(Naoko AMAKAWA)
- Chapter 1: Nation State Building and Conflict over Its Governor's Position in Cambodia
(Naoko AMAKAWA)
- Chapter 2: The Administrative System and Political Actor in the Modern History of
Cambodia (Hiroaki TAKAHASHI)
- Chapter 3: Reconstruction of Legal System in Cambodia (Kenji YOTSUMOTO)
- Chapter 4: System and Structure of Farmland Ownership: Restructuring Process after
Pol Pot Regime (Naoko AMAKAWA)
- Chapter 5: Family Kinship Structure and Its Reconstruction in Rural Cambodia:
A Case Study of a Rice Farming Village in Takeo Province
(Miwa TAKAHASHI)
- Appendix: Reconstructing Process of Teravada Buddhism after Pol Pot Regime
(Naoko AMAKAWA)

[Kenkyū Sōsho (IDE Research Series) No. 518]

Published by the Institute of Developing Economies, 2001

3 2 2, Wakaba, Mihama ku, Chiba shi, Chiba 261 8545, Japan

カンボジアの復興・開発

あまかわ なお こ
天川 直子 (研究企画部研究事業開発課, 地域研究第1部兼務)
たかはし ひろあき
高橋 宏明 (上智大学アジア文化研究所客員研究員)
よつもと けんじ
四本 健二 (名古屋経済大学法学部助教授)
たかはし みわ
高橋 美和 (愛国学院大学人間文化学部講師)

執筆順

カンボジアの復興・開発

研究双書518

2001年12月25日発行©

編者 天川直子

発行所 日本貿易振興会 アジア経済研究所

千葉県千葉市美浜区若葉3丁目2番2 ㊦261-8545

研究支援部 電話 043-299-9735

FAX 043-299-9736

印刷所 日本ハイコム株式会社

定価は裏表紙に表示してあります

ISBN4-258-04518-7

目 次

まえがき

序章 日本におけるカンボジア研究の現状	天川直子 3
第1節 本書の問題意識と主題	3
第2節 日本におけるカンボジア研究	5
1. 1990年代初頭までの状況	6
2. 近年の動向	7
第3節 本書の構成	10
第1章 カンボジアにおける国民国家形成と国家の担い手 をめぐる紛争	天川直子 21
序	21
第1節 カンボジアの領域形成	23
1. カンボジアの内陸化	24
2. シャムの勢力拡大	25
3. シャムとベトナムの狭間	26
4. フランス領コーチシナ直轄植民地とカンボジア保護王国の成立	27
5. カンボジアの領域の確定	28
第2節 国民国家の枠組みとしてのカンボジア	31
1. カンボジアの西側国境の確定	31
2. カンボジア人の独立の枠組み	32
3. カンボジアの独立	34
第3節 国民国家カンボジアの担い手	35

1. シハヌークによる政治権力の独占と行き詰まり 35
 2. 「国民国家の担い手」をめぐる武力紛争 37
 3. 人民革命党政権の起源 39
 4. 「カンボジア問題」の国際化 40
- 第4節 人民革命党政権による実効支配の確立 42
1. 問題設定 42
 2. 1980年代前半 44
 3. 1980年代半ば 47
 4. 1980年代後半 51
- 第5節 紛争の時代の終わりと「国内政治」の始まり 52
1. パリ和平協定の意義 53
 2. 「カンボジア問題」の「国内化」の後に残されたもの 55
 3. 紛争の時代の終わり 56
- 結語 58

第2章 近現代カンボジアにおける中央・地方行政制度の 形成過程と政治主体

高橋宏明 67

はじめに 67

第1節 フランス保護国化以前の中央・地方行政組織 68

1. 中央官僚機構 69
2. 地方官僚と領域支配体制 71

第2節 フランスによる統治体制の形成過程 73

1. 初期の中央行政機構改革の過程 73
2. 地方行政制度の整備 77
3. 間接統治体制の確立とカンボジア人官僚 80

第3節 独立からクメール共和国、民主カンボジア時代までの 中央・地方制度 84

1. シハヌーク時代の中央・地方制度と政治組織 84

2 . クメール共和国時代から民主カンブチア時代へ	88
3 . 民主カンブチア時代の地方行政と人民支配	89
第 4 節 カンブチア人民共和国時代における中央・地方政治体制	91
1 . 国家統治機構と官僚制	92
2 . 地方行政組織と地方革命人民委員会	96
3 . 人民革命党と国家建設戦線・大衆組織	97
おわりに	99
第 3 章 カンボジアの復興・開発と法制度	四本健二 111
はじめに	111
第 1 節 カンブチア人民共和国(1981年)憲法と復興・開発	113
1 . カンブチア人民共和国(1981年)憲法における復興・開発	113
2 . 復興・開発のための諸制度	115
第 2 節 カンボジア国(1989年)憲法における復興・開発	117
1 . カンボジア国(1989年)憲法における復興・開発の理念と目標	117
2 . 復興・開発のための諸制度	120
第 3 節 カンボジア王国(1993年)憲法における復興・開発	122
1 . パリ和平協定における復興・開発	123
2 . カンボジア王国(1993年)憲法における復興・開発の理念と目標	124
第 4 節 カンボジア王国(1993年)憲法下での法・制度整備の動向	125
1 . 統治機構の整備に関する法の領域	126
2 . 弾圧法としての性格をもつ法の領域	127
3 . 市場経済化の促進に関わる法の領域	129
4 . 急速な市場経済化など, 社会の変動にともなって引き起こされた 社会問題に対応する法の領域	131
結語	132
<付表> 法令年表	136

第4章 農地所有の制度と構造

ポルポト政権崩壊後の再構築過程

天川直子 151

序 151

1. 課題の設定 151
2. 先行文献, 既存データ 153
3. 調査方法, データの限界 154

第1節 カンボジア農村における土地所有制度の特徴 157

1. 「鋤による獲得」原則 157
2. 1980年代初頭の土地制度の特徴とその影響 158
3. 1989年以後の土地所有制度にみられる特徴 166

第2節 クロムサマキによる農地分配と農地所有構造の変化 168

1. 所有面積と世帯構成員数 168
2. 土地なし世帯の出現 170
3. 所有規模の平等性 172
4. 小括 178

第3節 所有権の移転の実際 179

1. 「主要な農地」の売買 179
2. 分与による所有権の移転 182

第4節 耕作権の移転の実際 185

1. 分益小作の実態 185
2. 定額小作の実態 186
3. 抵当の実態 188
4. 所有面積と耕作面積のずれ 189

結語 192

1. まとめ 192
2. 今後の展望 193

第5章	カンボジア稲作農村における家族・親族の構造と再建	
	タケオ州の事例	高橋美和 213
	序	213
	第1節	カンボジア親族論の先行研究 214
	第2節	タケオ州の稲作農村の事例
		プレイ・カバツ郡クダニュー行政区ソムダチ・ポアン村 216
	1.	調査村の概況 216
	2.	世帯構成 222
	3.	婚姻パターンとジェンダー 227
	4.	ライフサイクルと世帯サイクル 235
	5.	土地制度 クロム・サマキ時代から分配時代へ 238
	6.	労働共同 240
	第3節	ポル・ポト時代と以後の家族・世帯 241
	1.	世代分離管理下における家族・世帯 241
	2.	強制移動と帰還の家族史 245
	3.	ポル・ポト時代の残照 憎しみと復讐 247
	4.	欠損家庭のその後 248
	第4節	結語 250
	付録1	ポル・ポト時代の体験事例 移動と帰還 259
	付録2	元教師のライフヒストリー 271
補論	ポルポト政権崩壊後の上座仏教の復興過程	天川直子 275
	序	275
	第1節	カンボジアにおける上座仏教 276
	第2節	人民革命党政権下における仏教の復興 277
	1.	人々による仏教復興 277
	2.	人民革命党政権による仏教復興 280

- 3. 人民革命党政権にとっての仏教 281
- 4. シハヌークの帰国 283
- 第2節 国教としての仏教 284
 - 1. 「仏教は、国教とする」 284
 - 2. 国家と仏教 285
- 結語 286

クメール語の表記について

クメール語のカタカナ表記については、各章の執筆者間での統一は、本書ではあえて取らなかった。また、音節および単語の区切りに中黒を打つか打たないかも、各執筆者に任せてある（例：ボルボト/ボル・ボト）。

本書の執筆者はそれぞれ、できるだけ原音にちかい表記を心がけているが、同じ語が異なったカタカナ表記になってしまうのには、いくつかの理由がある。主要な原因と考えられる点をあげておく。第1に日本語の5母音だけではクメール語の基本的な9母音を表すことは不可能であるが、ある音を例えば「ア」に近いと判断するか「エ」に近いと判断するかは、聞き取り手によって個人差があることが指摘できる（例：シアマリアプ/シエムリアップ）。第2に、地名や人名などで、クメール語の原音からではなく、フランス語話者や英語話者によるローマ字表記を下敷きにして創られた日本語表記が用いられてきた結果、原音とかけ離れていてもそれが日本では一般に通用するようになっている場合、そうした表記に対してどの程度寛容になるかの判断もまた研究者間で大きく異なる（例：バツタンバン/バッドンボーン）。第3に、日本語にも音としては存在していても、すべて「ン」で表記されるn, ng, mの子音の表記をどうするかという判断、および末子音の表記をどうするかという判断は、これもまた個人差が大きい。

本書の執筆者は、アルファベット表記から原音を確実にたどれるようなアルファベット表記が確立していない以上、現時点ではカタカナ表記の方がふさわしいという判断は共有しているが、上記のような理由により、その統一を取るところまでには至らなかった。読者に若干の混乱を感じさせられるかもしれないことを申し訳なく思う一方、読者にクメール語の素養が若干あればとくに大きな誤解を生むものではないと判断している。